

手塚富雄著作集

8

中央公論社

手塚富雄著作集 第八卷

定価五三〇〇円

昭和五十六年七月 十日印刷
昭和五十六年七月二十日発行

著者 手塚 富雄

発行者 高 梨 茂

印刷者 青 木 勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八―七
振替東京二二三四
©一九八一 検印廃止

手塚富雄著作集

第八卷

回想と随想

目次

一青年の思想の歩み

初版序

第一部

巨人たちの肖像

知らない唱歌

日本は下り坂になったか

思想のあらし

寮の親善

対立の模型

進み行く人々

震災の激動

個人的なこと

第二部

徴 候

日本の心

満洲事変

三 三 五 五 七 二 六 二 一 五 四 三 三 二 一 七 五 五

破局へ

結び

現在に堪えつつ

そののち思うこと——新版に際して——

随想集

みんな新人

菊五郎とにらめっこ

偶感二題

社交三題ばなし

「野」^やの実

ひなの仏さま

大将の思い出

余暇の徳

バランス

休暇中の雑感

「にがい先生」の思い出

一〇五

一一四

一二四

一三三

一四四

一四四

一四七

一五〇

一五四

一五八

一六〇

一六三

一六六

一七〇

一七三

一七八

ざんげ

ヘッポコ談義

墓地への浮気

ある句会の思い出

世の中の客と店持ち

ぜいたく談

師走の本郷通り

無理と稚気

ひとが死ぬと、あれこれ

雷雨待望

八月

閑談的学問論

繰り返しについて

種々の回想

ふるさとを語る

第二の故郷——わが信州

一八〇

一八四

一八五

一八六

一九〇

一九六

二〇〇

二〇一

二〇四

二〇八

二一〇

二二一

二二九

二三三

二三三

二三三

若い人たち相手の四十年

定年種々相

ドイツの子供のしつけ

ドイツ人ありのまま

ドイツ詩人の跡をたずねて

サン・モリッツの旅

ポルドーの運転手

人生論的に

揺すぶれ人生の樹を

読書によるめざめ

自己の認識について——若いひとたちに

よろこぶことは多く

思っている……

その位に在らざればその事を謀らず

先師に遺訓あり

戒語

二二三

二二五

二二八

二四〇

二四四

二五三

二六〇

二六二

二六三

二六五

二七四

二七九

二八八

二九〇

二九一

二九五

本源に帰るということ

阿修羅と青年

青年についての対話

知識人のメンタリテイ

現代の青年男女

初一念をつらぬけ

日本の大学生は変らない

大学セミナー・ハウス行

日々の感想

座右の書

伝統をはぐくむ現代

教師というもの

欠けているもの

言葉の問題

七五三の子たち

楽器ほしや

二九六

二九八

三〇〇

三〇九

三二〇

三三二

三三九

三三三

三三六

三三六

三三七

三三八

三三〇

三三一

三三三

三三三

無言でつづくもの

人、遠近より

率直な批評家

加藤誠志先生

武者小路さんを思う

富士見の尾崎喜八さん

一高の講師時代の安倍能成さん、その他

朝比奈泰彦先生の名言——ならびに川口篤、遠藤薫両君のこと

残雪さんのこと

矢内原さんのこと

最後の自由人

同車の縁——和辻哲郎さん

抑制と強靱

孤独な木村謹治先生

大きい吹田順助先生

思ったことをやり通すヴァーテノーさん

三三四

三三六

三三六

三三七

三三九

三四一

三四三

三四七

三五〇

三五三

三五四

三六四

三六九

三七三

三七五

三七六

年譜・主要著作年表

マロニエの花と尾高朝雄教授	三七七
久松潜一先生のこと	三七八
相良守峯先生の忠言	三八一
チェーホフにちなんで——小林三郎のことなど	三八二
大山定一さんのこと	三八六
小牧健夫先生のこと	三八八
小牧健夫先生の感心	三九一
故渡辺一夫会員追悼の辞	三九二
シラー研究者としての新関良三先生	三九六
市井のゲーテ蒐集家	四〇八
古田君の二つの姿	四一三
手塚キクの生涯の一面	四一七
あとがき	四二四
	四三三

回想と随想

一青年の思想の歩み

初版序

この書は、私の内的発展の全部を書こうとしたものではない。ただ政治という一つの観点から、それと私との心の交渉を書きたかったのである。その場合、私の考えている政治とは、私の生活は自分ひとりで成り立っているのではなく、他とのつながりを自覚しないわけには行かない、というほどの意味である。根が非政治的な私には、本来そういうことは問題でないはずであった。しかし私たちの半生は、いやでも自己と他との連関に眼を向けなければ、自分の仕事の方位づけさえできない激流の中にあつた。そして、ついにわが国がおちいった今日の運命が、この本を書かせるきっかけになつたことは、むろんである。戦後、私は多くの知識人の書くものを読んで、非常にたびたび疑念をおこすことがあつた。それらの人の多くにとっては、国がこんにちに立ち至つたことはその見通しの上であり、一切の過誤は憎むべき一部不逞の徒にあり、自分自身は無謬であつたかのように読みとれるのである。歴史家でない私には歴史的通観はできない。しかし、私が物ごころがついてからのことを考えても、事情はけっしてそんな簡単なものでないことが、痛感されるのである。みんなが関係しているのだ。たと

え直接、過去の歴史に関係や責任のない若い人たちでも、そんなふうには自己を切りはなして考える過去の知識人の態度をうけつぐなら、やはりそのことによって、日本の歴史にかかわりをもつてくるのである。私は私自身の生活を書くに値するものと、うぬぼれている気持はすこしもない。ただこの日本のかなしむべき激動期に、片隅の一市井人が、どんな心で日々をすごしたかを、できるだけ嘘を少なくして書いておき、後にこの時代のことを考える人の多少の参考にし、また私たち自身の将来の歩みに資したいと思つたのである。事件の叙述は、万年子供である私の魂に映つた比重によるもので、外的に歴史的記録を狙つたのではない。ここに書かれたことは矛盾が多く体験範囲も狭いことは私も心得ているが、それなりに、日本の歴史の中の一つの内的生態を出したのであつた。人は私の立場や世代の境遇や考えかたや精神状況やその類型について、いくらでも格づけの言葉を与えることができるだろう。それは人々にまかせて、ここではただ、自分においてはこうだつたと提示だけをしたかつた。いうまでもないが、この書をこういう表現のしかたで書きうるのも、私がいまの時代に生き延びているからであつて、それも忘れていたのではないつもりである。第二部以下をじっくりと書きたかつたが、そうすればこの書の二倍三倍の分量になつたらう。それで大へん後半がいそがしく、叙述にむらぎできたことを、読者にお詫びするしだいである。

一九五一年十月

著者

第一部

巨人たちの肖像

明治三十六年に生まれた私は、社会的な通り言葉でいえば、わが国の資本主義的・帝国主義的上昇期のざわめきのなかに生長したわけである。だが、地方の一中都市(宇都宮)の片隅の町の、まずしいひっそりとした家の子として物ごころのついた私にとっては、周囲は、永遠につづくであろうと思われるつつまじやかな父母たちのいとなみによって代表されるにすぎなかった。ただ、そういう私たち幼い子供の心にも、わが国が日清日露の二大戦役に勝ったということは、非常な安心と誇りをもって、しっかりと座を始めていた。子供たちにとって、日露戦争の將軍の名ほど耳に熟しているものはなかった。大山、乃木、黒木の諸大將、海軍では何をおいてもあの東郷提督。それらは私たちには、疑うべからざる偉大さをもった現存の英雄であった。ちょうど相撲では常陸山と梅ヶ谷が、絶対不動の強さをもって大横綱として君臨していたように。子供たちの心にとっては、日本のどの方面にも、そういう揺らぎのない巨人が立っていて、しっかりと世を、国を、ささえてくれているのであった。どういうことをなかだちとして子供たちがそれらの英雄たちに親しんできたかといえば、絵本よりもっと素朴な

もの、メンコとかバとかと私たちの町で呼ばれていたものに描かれていた絵模様によってであって、一銭店やにならんでいるそれらのオモチャは、くりかえしくりかえし、これら巨人たちの肖像を図案の資源にしていた。年に一度か二度流行の波があり、私たちはそのつど、あるいは円形の、あるいはシオリ形の厚紙の種類の蒐集熱にとりつかれ、私たちの身辺にはそれらの威厳にみちた風貌が氾濫した。重厚な大山大将の姿が、ことに子供たちの畏敬を誘った。幼年の私は、自分の発意によってか、大人たちのさそいによってか、いまに大山大将みたいにと言ったことがあるらしく、大人たちが私にたいする呼び名は、多分の機嫌取りの気味をふくめて、「大将」、もしくは「大山大将」であった。そう呼ばれる子供は、まだなんの苦もなく、まるまると肥っていた。

それらのほかにそういうオモチャ類の図案の記憶をたどれば、子供の感情の栄養となっていたものは、多すぎることくらい国威万能主義的・軍国調的なものであったといえる。「チャンチャン」とか「ロスケ」とかい言葉を使ったのも、そういう絵のかもしれないし出す空気においてであった。日本の地雷は冲天高く炸裂して、それに虫けらのように吹きあげられているのは、長い辮髪をもった旧式な兵士たちでなければならなかった。思いつめたような表情をしている日本兵士のくり出す必殺の銃剣の前には、碧眼赤髻の異国兵が、口をあげ腰を浮かして、いくじのない姿態をみせていた。日本が、それらの国々より、強い、したがって偉いことは、まちがいのないことだった。なにしろ現に戦争に勝っているのだから。大きいフロシキ包みを肩にしてキレ地類の行商をしている中年の中国商人は、「李先生、李先生」と町の主婦たちに重宝がられ、親しまれたが、そのうちとけかたには、かつての戦敗国民にたいする、優越感をまじえた寛大さがまじっていないということではできなかった。その商人の言葉つきを口まねする調子にも、そのひびきは聞きとれた。あちらでも心得て、まわらぬ舌の日本語を愛嬌にしていたが、しかし、そうして馬鹿にされつづけているように見える中国の行商人が、じつは強い商魂の持主で、この町における永年の奮闘によって、しっかりした財産をつみあげているのだということは、大部分は彼より貧乏な